

要については、次のとおりである。

資料①(1~6)は、小樽新聞(1910年10月23日付)の樺太支局発信による「樺太の農家副業」である。下線の内容は、農閑期の副業の必要性、副業としての野草の手工、野草の種類、野草の手工品、副業として取り組む理由、副業奨励の意義などがある。

資料②(1~7)は、小樽新聞(1911年5月16日付)の樺太支局による「樺太だより」である。下線の内容は、大泊婦人会による野草の編み物、技術指導者、帽子編みミシンの購入、帽子見本の送付依頼、野草の産地、農村家庭および小学児童への冬期副業対策、島内産の野草を活用した手工品開発などがある。

資料③(1~15)は、樺太日日新聞(1911.9.2付)の「モロチ草刈取利用」である。下線の内容には、大泊支庁の取り組み、モロチの刈取時期、視察者、視察地、野草の産地として有望な地域、視察地のモロチの生育状況、モロチの葉茎、モロチの利用、ナクベの概況、ナクベの収穫実績、モロチの畳表製作機械、製作機械の導入目標、現況の課題、モロチの乾燥法、副業原料としてのモロチの将来性などがある。

資料④(1~3)は、小樽新聞(1911.12.19付)の「藁細工と小樽」で、当時の縄や筵類の道内移出入の一端を理解することができる。下線部の内容は、小樽港で集散された縄筵の藁細工品と産品高、藁製品の道外産地と藁細工の用途、小樽からの藁細工品の移出などである。なお、藁細工品の貨物取引と主な産地は表1(p104)に整理している。

資料⑤(1~7)は、樺太日日新聞(1912.3.7付)の「モロチ利用事業」である。下線部の内容は、ナクベ(江ノ浦)の島内産モロチを使った手工の研究、ナクベにおける畳表と薄縁製造機械の導入、製作数と販売、品質と用途、各種値段、原料費と工賃、販路の拡張などである。

資料⑥(1~4)は、樺太日日新聞(1912.4.9付)「モロッチ編の優等者」である。下線の内容部は、1911年から進めている大泊小学校での手工科の活動、モロチ草を用いた夏帽子と編み方、制作物の展示と優秀者の表彰、成績佳良13名についてである。

資料⑦(1~4)は、樺太日日新聞(1912.4.11付)「野草製品販売」である。下線部の内容は、大泊小学校児童の真田編みと夏帽子製作、型抜き残物による鍋敷き製作、留多加の筵製造状況と販路、販売実績などである。

資料⑧(1~3)は、小樽新聞(1912.4.29付)で、4月25日樺太支局発の「樺太だより」にある「野草製造販売」である。下線部の内容は、大泊小学校児童の真田編みと夏帽子製作、残余物による鍋敷き製作、留多加の筵製造機器と販路拡張などである。

(2) 取り上げた資料の課題

対象資料は、官による副業奨励の施策と、民による興業について、それぞれの進展の過程を理解することができる貴重な資料といえる。特に、野草の種類、手工の普及、手工品とそれぞれの工程や工具を含めた製作技術など、樺太における3ヵ年の取り組みを明らかにしたい。

また、樺太で冬期に安定した生活をおくるために、野草の手工が有望な生業として、官民双方でどのように認識するに至ったのかを示したいと考える。具体的には、樺太庁大泊支庁による冬期の副業奨励と普及に向けての調査・研究と、野草を原料とした手工の有効性を確認する。次にナクベ(江ノ浦)の筵の製造販売は、大泊支庁の副業奨励とどのような関係にあったか、また民間がいち早く機械を導入した背景も明らかにしたいと考える。

本稿では、まず官民の取り組みを項目ごとに整理、検討するとともに、現代に伝承されている野草を用いた手工と比較して、手工技術に関わる民俗知識の伝承について考察したいと考える。

3 野草活用に向けた官民の取り組み

(1) 樺太庁大泊支庁における副業奨励

大泊支庁は、農閑期に農民が怠惰に過ごすのではなく、冬期の生計を補うことができるように、1910年から冬期の副業対策を進めた(資料①-1)。具体的には、島産の野草を活用した手工品を冬期に生産し、自家利用や剰余品の売却により、安定的な暮らしを実現させようとしていたのである。実際にこの事業は好成績をあげていたようで、農閑期における農家の収入源としてかなり有望視されていた(資料①-2)。

多くの物資を北海道や本州に依存するばかりでは不経済であり(資料①-5)、必需品を島内で自給する事業の創設は官民ともに急務であったといえる(資料①-6)。大泊支庁は、冬期の生活改善と経済的な基盤強化をはかる上で、すでにナクベで試行されていた野草の手工に着目し、女性による家内業を新たな事業に位置づけてこの事業を広めようとしたのである(資料③-1)。

手工の担い手は、農村家庭や大泊尋常小学校児童としている(資料②-6)。さらに、大泊婦人会には、野草を用いた手工の講習会を実施するとともに(資料②-1)、大泊尋常小学校には手工科を設けて実技教育を進めたのである(資料⑥-1)。

1) 島内産野草の種類とモロチの産地

旧樺太で農閑期の副業として見込まれる野草、つまり生活に必要な器物の造形に適した植物として好成績をあげた野草は、「モロチ、オホスゲ、ハマコスゲ、オホアシ、アイヌワラ、外に尚ほ数種あり」(資料①-3)と、

種類が豊富にある。これらのなかでも大泊支庁が特に注目していたのがモロチである。モロチはテンキグザ、ほかにハマニンニクとも呼称されている。本稿では、小樽新聞と樺太日日新聞ともに取り上げている「モロチ草」を生かし、標準和名ではなく民俗語彙としてモロチ（図班 I-1~4）と表記する。

樺太のモロチは、留多加方面の原野に無尽蔵にある（資料②-5、資料③-4）。大泊支庁ではこの野草を利用することを目的に、図2に示したナクベから留多加川口を実際に視察している（資料③-4）。そして、モロチは、この間の砂浜約12kmにわたって、幅約9mから約18mの帯状にモロチの密生地があることを確認している（資料③-4）。

このナクベという地名は、図3のとおり1910年成立の『樺太拓殖一覽図』（北海道大学附属図書館蔵）では「ナグベ」と表記されている。また、1912年3月の記事には「江の浦（ナクベ）」（資料⑤-1）とある。1920年の図1では「江ノ浦」とある。ナクベは、留多加川川口の北東側、約12kmの位置にある。

松浦武四郎の「再航蝦夷日誌 卷之拾一」には（秋葉1999：397-398）、留多加川から鈴谷川の間にナクベはなく、「イタツコシラエチシ」と「カムイシヤハ」だけとなっている。前者の註には「ヲタ・クシ・ライ・チシ。砂地・向方・（誰かが）死に・泣いたところ」とあり、この地域が砂地であったことをうかがわせる。

大泊支庁の視察では、留多加川以南の多蘭内浜までモロチの密生地があるとみていた（資料③-5）。

野草の生育には地域差が生じていたようで、ナクベ付近の密生地では多数の放牧馬による食害が認められるほか、西留多加の密生地では締め粕作りの影響を受けて生育良好としている（資料③-6）。

モロチの葉茎は、葉幅が約1.8cmから約2.1cm、丈が約91cmから約121cmである（資料③-7）。モロチ草の採

集時期は、冬期の手工に備えて夏期に採取している（資料②-6）。モロチの手工利用は、乾燥させることで光沢が良くなり、織物などの原料になるとしている（資料③-8）。

2) ナクベにおけるモロチの刈り取り時期と乾燥法

大泊支庁が少なくとも1911年には、モロチの産地として有望視していたナクベは約200戸の集落で、モロチの活用を先駆けて進めていた地域である（資料③-9）。ここでは、すでに乾燥モロチ約1,875kgを収穫して、農漁業の閑散期に手工をしていたのである（資料③-10）。この地域の実績があったからこそ、大泊支庁は、野草による手工を本格的に奨励するに至ったとも考えられる。

野草の手工は、ナクベの事例を元に、移住後の農家が必要とする筵、俵、縄など農具の自給を目指そうとしたのである（資料①-4）。さらには、生活物資の帽子や晝表に加えて、手工品を多様化して地場に定着させようとしている（資料②-7）。

これらの原料となるモロチの刈り取り時期は、土用から2、3日が最良日であるとしている（資料③-2）。その理由として、この時期がモロチの刈り取りから乾燥までの作業を行う上で、天候に恵まれやすい時期であると認識していたのである（資料③-2）。

ナクベが取り組んでいた乾燥法は、素乾、煮乾、叩乾の3種で、それぞれ利点と欠点がある（資料③-14）。これによれば、素乾は、天候に気をつけることで青色を帯びて綺麗な原料になるが、乾燥中に降雨があると赤変する。煮乾は、モロチを一旦熱湯に浸して乾燥するもので、ほぼ白色の原料となる。叩乾は、モロチを束ねて、茎を木に叩き付けて乾燥する方法で、麻や「揉菜」の代用になるというものである。

3) 大泊婦人会と大泊尋常小学校の取り組み

大泊婦人会の活動は、1911年5月16日付記事にあるように、講師に高田技師を招いてモロチを使った編物の



図2 ナクベ（江ノ浦）付近（図1の部分拡大して作図）



図3 樺太拓殖一覽図（北海道大学附属図書館蔵）

講習会に始まる(資料②-1、-2)。この講習会の内容は、購入済みのミシンを使った帽子編み用の実技指導である(資料②-3)。事前には、講習の見本となる帽子を入手しようとしていた(資料②-4)。

この講習の見本に取り寄せた帽子の形態について、直接的に結びつける記述はないが、筆者は、モロチを麦稈にみたてた夏用の麦わら帽子の類と考えている。理由としてあげられるのは、翌1912年4月9日付の大泊尋常小学校の活動を示す記事に、児童が手工したのは、夏帽の真田であると記されていることにある(資料⑥-2)。

真田の編み方は、図4(杉田ほか 1994を元に作図)のとおり五平と四菱の2種類で、熱心な児童は数ヶ月のうちに上達しているとの記述もある(資料⑥-2)。同月11日付の記事によれば、児童が手工した真田は、帽子製造の技術者にあずけられている(資料⑦-1)。また、小樽新聞でも児童の手工したモロチの真田は夏帽子に製作中と紹介されている(資料⑧-1)。

真田とは、いわゆる麦稈真田のことで(森元 2018: 129)、カンカン帽などの夏用帽子(図版 I-5・6)を作るための素材で、原料や編み方は多様である(杉田ほか 1994: 535)。

帽子製作の技術者と大泊婦人会とのつながりを示す記事もないが、前述のとおり大泊婦人会は、帽子編みミシンを購入し(資料②-3)、講習も受けていることから、児童が手工した真田も含めて、婦人会が夏帽子を製作していた可能性は高いといえる。

麦稈真田は、三平(図4左、図5右)のほかさまざまな編み方がある中で、児童は五平(図4中)と四菱(図4右、図5左)といった2種類の真田を手工した(資料⑥-2)。三平や五平というのは、両端が平行になる編み方で、麦稈の奇数本数で名称が変わる。また、四菱は、両端が波状になる編み方である。

児童の手工品は、大泊支庁の審査により、特等6名、甲7名、乙16名、丙10名、丁3名となり(資料⑥-3)、評定を受けた42名の内、13名が優秀者として大泊支庁長から表彰されている予定になっている(資料⑥-4)。

児童の手工品は、真田を用いた夏用帽子のほか、土瓶や火鉢の下敷物に製作されている(資料⑦-2、資料⑧-2)。

(2) 民間による野草の活用

民間によるモロチ利用の試みは、1911年9月に大泊支庁がナクベを視察した時点で、モロチを利用して畳表を織るために50円の機械2基を購入していたほか、15円で自作するまでになっていたことが理解できる(資料③-11)。加えて原料となるモロチを確保するために乾燥法が試されていた(資料③-14)。

翌年3月の記事では、ナクベ居住の中野恒蔵氏が、島内産モロチの利用方法について数年来研究してきたことが記されている(資料⑤-1)。この研究成果は、1911年に導入した岡山県から購入した1台を自作で10台に増し、畳表や薄縁を製造するまでにもなっている(資料⑤-2)。生産量は、4日までに畳表600枚を製造し、すべて大泊へ販売する手はずとなっていた(資料⑤-3)。

一方、翌月の記事には、留多加管内には蕙の製造の機械が10台あり、冬期間に多数の筵を生産し、付近の農村や漁村に販売していたことも記されている(資料⑦-3)。このように、1911年9月から翌年4月までに、ナクベを含む留多加管内では、モロチを用いた敷物の製造販売が各段に進んでいたといえる。

ナクベで生産した畳表は、一般家屋の座敷としては不向きではあるが、漁場や農家の使用には耐えられるとして、売れ行きは良好である(資料⑤-4)。この製畳表の小売価格は、横糸に原料1本を通した引通し織りが1枚45銭、2本の原料を中央で継いだ上質の中継織が1枚50銭で、藺草の畳表に比べて非常に安価であるとしている(資料⑤-5)。

ナクベの原料費と工賃について、畳表1枚につき、原料のモロチ(横糸)と麻糸(縦糸)など16銭、1台の機械で1日4枚、1人1日約1円の工賃というように、農家の副業として利益があるとしている(資料⑤-6)。原料に麻糸があることから、ナクベの畳表は、モロチ製の麻引表を生産していたことになる。さらに、この麻引表の織り方は、引き通し編みと中継織りの2種類があった。

モロチ製の麻引表は、1枚につき、原料費と工賃を合算して1枚あたりの製造原価が約41銭であり、売り上げとの差額が4銭から9銭となる。織機などの初期投資分や維持費を含めなければ、600枚の販売差額は約24円から54円となる。製造日数は、1人1日4枚として、延べ



図4 麦稈真田の編み方例(左:三平、中:五平、右:四菱)



図5 夏用帽子の頂部(左:四菱、右:三平)

150日。1ヶ月25日計算で6ヶ月を要することから、9月以降の冬期の副業として労働を確保し、そしてある程度の収益が見込める有望な事業とみたのであろう。

(3) 販売実績と将来性

前段で、織機の値段を示したように、ナクベで織機を購入した場合、輸送費を含めて1台約50円（資料③-11）と高額であり、個人で容易に導入できるものとはいえない。600枚の畳表を販売した差額では、織機の代金に満たない場合もある。しかも、高額な織機を入手したからといって、上質な畳表の生産に直結するものではない。先の畳表の値段にもあったように、50銭の畳表を製するには（資料⑤-5）、原料のモロチの確保と中継織りの技術が必要になる。さらに、仕上がりの出来不出来など技術者の個人差により1日4枚の生産を見込めない場合もある。つまり、織機の初期投資に見合った収益を必ず得られるとは限らない事業でもある。

冬期における農漁村の副業としてモロチの手工を捉える時、織機を購入せずに自製の織機1台を導入した場合、実費の約15円に加えて（資料③-11）、織機の組み立て作業を要することになる。また、土用頃にはモロチの刈り取りと乾燥作業、織り作業開始前までに麻糸などの資材の調達と費用の工面が必須となる。さらには、最低限1日4枚の生産ノルマを、9月以降、翌年3月頃までの間に150日間続けなければならない。これを個人だけで賄うことは難しそうである。実際に、織機の専売権所有者との交渉を経て、ナクベにおいて織機製造が可能となっても、実費が必要なことから全戸で所持することは実質的には難しかったといえる（資料③-13）。

ナクベで手工した製品は、1912年3月付の記事にあるように、織機10台で畳表を生産している（資料⑤-2）。ところが、翌月の記事によると、留多加管内における織機の台数は10台で筵を生産している（資料⑦-3）。ナクベの織機10台と、留多加管内の織機10台が、同じ織機であるのかは、現在のところ確認できていない。したがって、この織機が畳表と筵製造の兼用機械なのか、それぞれ専用の別物なのかは明らかではない。

ナクベの織機の導入は、1911年9月の大泊支庁による視察の報告では、モロチを用いて畳表を織るために購入した2台の織機が基になっている（資料③-11）。これら織機の導入経過を時系列に押さえた上で、留多加管内でモロチをどのような製品作りに生かそうとしていたか、改めてモロチの活用などを広く調べる必要がある。ただ、留多加管内で生産したモロチ製品は、織機を用いて製作した畳表、薄縁、筵などの敷物類が主体であったことに間違いはない。

販路は、留多加周辺の農村と漁村（資料⑦-3）で、い

ずれも好評を得ていることになる。ナクベで製作された麻引畳表は、全て大泊へ販売している（資料⑤-3）。留多加管内の筵製造は、1911年には製作者の技術が上がり、また、樺太の需要にも応じられるようになって、真岡など西海岸の地域まで販路が広がっている（資料⑦-4）。小樽新聞でも好評なモロチ製の筵を紹介しつつ、加えて販路が拡張傾向にあるとまとめており（資料⑧-3）、モロチ製の敷物は有望視されていたのである。

ナクベ地区では、「毎戸に此機械を備付け、モロチ表をして、将来ナクベの名産たらしめんと云ふ」（資料③-12）と、全200戸に織機を普及させてモロチ表を地域の名産物へという構想が描かれている。しかし、官の貸付や補助が前提になれば個々に普及するには至らないといえる。事実、ナクベ地区では、畳表や筵の製造に向けて10台の織機を構える現場があったのである。したがって、自家の生産というよりも、出面という労働力の提供が、当時のナクベ住民の実態ではなかったか。

留多加管内におけるモロチを用いた副業の課題は、販路を島外に求めて、事業を拡張して経営することであった（資料⑤-7）。そのため、新たな機械を導入し、各製品の生産量を高めて、島外にも拡販しようという考えであったのであろう。

(4) 小樽港の貨物取引にみる筵製品とモロチ筵の可能性

小樽港における藁製品の貨物取引を報告した1911年12月の記事（資料4）を整理した上で、留多加管内で生産されたモロチ製の敷物類の意義を確認しておきたい。

小樽港で取り扱う縄や筵などの藁製品の取扱先における製品の積出量と品質は（資料④-2）、縄類の生産量が最も多いのが酒田で、品質が極めて優良とされている。筵類は、佐渡がメインで、次に越中が続く。呎類は、越中が最良となる。草鞋及草履は、佐渡が主産地である。主な藁製品の取扱で上位とされる地域は、山形県、新潟県、富山県産の3県である。

縄類の産地と用途は（資料④）、大間縄が酒田、秋田、津軽産が多く海産物用となっている。中間縄は、三国、秋田、酒田、敦賀、津軽が多く、海産物及雑穀用である。土木縄は、主産地の酒田の他に秋田と津軽産があり、土木工事及雑穀類の荷造用としている。大倉縄は、7割りが酒田、他に秋田、津軽で、雑穀類の荷造用である。実子縄は、主産地の秋田の他に佐渡と越中産があり、網製造及俵製造用としている。樽掛縄は、酒田産が大部分で樽物や下駄棒用である。網羽縄は、佐渡産で鯨場用である。縄類は、青森県、秋田県、山形県、新潟県、富山県、福井県というように、全て日本海側の地域から移入されたものである。

筵類（資料④）は、囊筵、干筵、建筵、折筵、鞍筵に吠を加えて6種となっている。それぞれの用途と産地をみると、囊筵は雑穀類荷造用の筵で、千葉、神奈川、越中、津軽産である。干筵は海産物や雑穀用の筵で、7割を越中が占め、その他若狭、佐渡、三国、津軽産という。建筵は魚粕荷造に用いる筵で、越前産が主である。折筵は農産物用の筵で、越中産となっている。鞍筵は菜種用で、佐渡産である。吠は菜種用などに用いるもので、越中産である。このように、囊筵を除き、青森県、新潟県、富山県、福井県産の筵が小樽に集まっている。

藁製品の主な積出高の取扱額は（資料④-2）、酒田港（山形県）、伏木港（富山県）、新町港（新湊港のことか？）が10万円以上で、滑川港（富山県）、敦賀港（福井県）、三国港（福井県）が5万円以上と、富山と福井県下の港が上位となっている。

これら藁製品の小樽港における貨物取引された藁製品とそれぞれの取引金額は、表1のとおりとなる。ただ、資料④にある藁製品の合計額は837,692円であるが、内訳合計との齟齬があるため、表1では内訳額にしたがって836,692円としている。

この小樽港における藁製品の貨物取引金額で注目すべきなのは、496,047個の筵類で、取引金額が421,642円とあるように、貨物取引総額の約50%を占めているところである。筵1個の単価は、85銭である。ただ、筵類1個の個数が筵1枚をさすのか、あるいは数枚入りで1個なのか、その内容量は不明である。

藁製品の小樽港からの移出先、つまり道内の需要地は（資料④-3）、次のとおりである。鉄路における取引先は、昆布駅（蘭越町）から帯広駅付近（帯広市）までの範囲である。また、航路における取引先は、小樽市以北から網走市まで範囲の沿岸各港で、樺太も含まれている。

小樽港の取引から藁製品の需要をみると（資料④-3）、かつて海産用が大部分を占めていたものから、少なくとも1911年当時には農産用が7割を占めるに至っている。これは北海道の農業が進展したことに伴い、農業用の需要が高まっていた実態を示していると考えられる。当然、筵類においても、旧来の漁業用に加えて、農業用の需要が道内全域に高まっていたのであろう。

実際に樺太では、真岡地方から筵200枚の注文があったように（資料⑦-4）、北海道に遅れて農業移住を進めた旧樺太でも同様に需要が高まっていたといえる。島内産の

表1 小樽港の藁製品の貨物取引（資料④から作成）

	数量（個）	金額（円）	%	@	主な産地
大間縄	2,983	3,281	0.4	1.10	酒田、秋田、津軽
中間縄	47,536	22,341	2.7	0.47	三国、秋田、酒田、敦賀、津軽
土本縄	30,156	60,312	7.2	2.00	酒田を主とし秋田、津軽
大倉縄	35,810	92,106	11.0	2.57	酒田、約七分其他秋田、津軽
夷子縄	2,669	29,894	3.6	11.20	秋田を主とし佐渡、越中
縄類	15,763	22,067	2.6	1.40	樽掛縄（酒田）、網羽縄（佐渡）
筵類	496,047	421,642	50.4	0.85	囊筵（千葉、神奈川、越中、津軽産）。干筵（越中、若狭、佐渡、三国、津軽）。建筵（越前）。折筵・吠（越中）。鞍筵（佐渡）。
草鞋草履	61,685	185,049	22.1	3.00	佐渡、秋田、越中
計		836,692	100		

野草を用いて筵を生産することは、国内の各産地の動向や物流に左右されることなく、島内需要に向けて安定供給を可能とする事業になりえたと考えられる。

また、島内だけではなく需要増が見込まれる北海道内への販路拡大に結びつけることも可能となる。モロチを用いた副業は、生活の糧にとどまらず、冬期の産業育成にもつながり、経済的に大きく貢献する事業になりえたと考えられる。

4 野草を利用するための民俗知識について

これまで取り上げてきた1910年代の記事は、樺太で官民をあげて進めていた冬期の副業を詳細に知ることのできる貴重な資料である。野草の一つであるモロチは、稲藁の入手が困難な地域において、生活や生業に必要な物資を自らが手工するために欠くことのできない原料であった。しかもモロチ製の手工品は、冬期の生活を安定させるための糧であり、島内の需要を賄うだけではなく、販路を北海道へ広げることも可能であった。

大泊支庁が1910年から試みた冬期の副業奨励で特筆すべきは、北海道庁が1919年から閑散期の副業に奨励した竹細工などの講習会（舟山 1991：130）に先駆けて実施していたところである。

手工品の原料となるモロチの刈り取りから乾燥までの作業には、野草利用のための民俗知識を具体的に知ることができる。なかでも野草の刈り取り時期は、樺太では土用後数日の内、桧山では土用後1週間を過ぎないうちに済ますと伝承されているように（舟山 1993：49）、いずれも土用が収穫時期の目安となっている。

また、樺太のモロチの手工には、2つの異なった製作技術がみられる。aは、織機を用いて織る技術で、畳表・薄縁や筵などの敷物（図班Ⅱ-5）を製作していた。bは、夏用帽子や鍋敷などのように、原料を紐状に編んでからコイリングで成形する技術である。

かつて、筆者は、菅江真澄の「えみしのさえき」

(1789)に記された(内田・宮本 1971:11)、モロチで編まれた「テンキ」という背負い袋に興味を持ち、桧山地方を調査した。この調査により、桧山地方ではテンキグサをモロチあるいはハマニンニクと呼称し、砂浜に自生していることを確認した(舟山 1993:48)。あわせて、モロチという呼称は、北海道の南西部では、少なくとも18世紀末から現在まで伝承されていたことを明らかにした。しかし、本稿がとりあげたように、1910年代の旧樺太でもテンキグサをモロチと認識しており、呼称の分布範囲は桧山地方にとどまらない。

先の調査では、菅江真澄が記録した背負い袋と同型の編み袋は、タツノヒゲを縄に縋ってから編むという事例(図版II-1~4)だけで、モロチを用いた編み袋は確認できなかった。一方、アイヌ民族の容器(荒山 2013・2016 大坂 2017)や編み袋(大坂 2019:34-43)に示されているように、アイヌ民族にはモロチを用いたaの編み袋があるにもかかわらず、和人の編み袋(図版II-6)で編む袋の素材にはモロチはみられない。聞き取りでは、モロチは縄縋いに不向きであることから編み袋には用いないと伝承されている(舟山 1993:48・52)。しかし、モロチを紐状にすることを可能とする旧樺太の麦稈真田の技術は、アイヌ民族と和人の背負い袋の製作技術にみられる民族差を比較する上で重要であると考えられる。

今後、編み袋を観察する上で、縄縋いの技術だけではなく、麦稈真田などによる成形技術にも注視して調査を進めたい。あわせて、アイヌ民族などの先住民、あるいはナクベ付近の馬の放牧による「食害」という認識などにもみられるように、すでに野草を活用していた人びとと、新興の移住者との間に生じた問題の有無などについても探る必要がある。

5 おわりに

本稿では、1910年から1912年までの小樽新聞と樺太日日新聞の記事から、旧樺太南部の東伏見湾沿岸に位置する大泊から留多加周辺の海浜に繁茂する野草を活用した冬期の副業について、官民の取り組みを項目ごとに整理し、検討してきた。なかでも、野草の種類、手工の普及、手工品とそれぞれの工程や工具を含めた製作技術など、樺太庁の3ヵ年の取り組みを明示することができた。

特に、野草の手工は、旧樺太で冬期に安定した生活を送るために有望な生業として、少なくとも1910年代初頭に、官民双方で取り組んだ過程を示すことができた。また、樺太庁大泊支庁による副業奨励と普及に向けての調査・研究は、ナクベで先行していた民間の事業を基盤に進められていた。官による副業奨励は、民の興業と冬期の生活の安定、さらには、地産地消を目指す施策で

あったといえる。

最後に、旧樺太の手工についての記事から、新たに真田紐にしてから帽子などに成型するという製作技術の知見を得た。今後は、この知見をもとに、容器や背負い袋といった編物製品などの取蔵資料を改めて分析し、南域からの移住者が、より寒冷な地域で生活することにより、新たに身につけた技術を検討したいと考える。

謝辞

この調査報告をまとめるにあたり、次の方々からご協力を受けました。ここで取り上げた新聞記事は、北海道博物館の山田伸一氏からご提供いただきました。また、同館の亀丸由紀子氏、工津尋美氏、山田日登美氏には、三平、五平、四菱の編み方についてアドバイスをいただきました。さらに、1992年の桧山地方の調査は、三上千代蔵氏にご案内いただき、野草を実見することができました。また、文献調査の際には、雪印種苗株式会社の田代真子氏、田中帽子店有限会社ビスポークの中田恭兵氏からご教示を受けました。

末筆ながらここに記して厚く感謝申し上げます。

参考文献

- 秋葉實翻刻・編 1999. 校訂蝦夷日誌 2. pp. 383-399. 北海道出版企画センター.
- 荒山千恵 2013. ハマニンニク製の容器「テンキ」-テーマ展「アイヌの工芸テンキ」および関連事業からの報告-. いしかり砂丘の風資料館紀要 3: 55-64.
- 荒山千恵 2016. ハマニンニクの利用と「テンキ」-18世紀後半の絵図・記述を中心にして-. 北海道民族学 12: 50-59.
- 内田武志・宮本常一編 1971. 菅江真澄全集 2. pp. 9-78. 未来社.
- 及川寛 1964. 天北地帯における牧草栽培. 牧草と園芸 12-5: 4-6.
- 大坂拓 2017. 千島アイヌ製作のハマニンニク製容器-平成28年度新取蔵資料の紹介-. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 2: 99-102.
- 大坂拓 2019. アイヌ民族の編袋-地域差と年代差、及び「土産物」・「伝統工芸品」としての継承-. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 4: 25-60.
- 杉田幸二郎・甲斐哲郎・明石淳子 1994. 講座服飾シリーズ-1帽子(2). 繊消誌 35-10: 17-29.
- 舟山直治・氏家等 1991. 北海道に残存する背負い籠(ショイカゴ)の形態と用途. 北海道開拓記念館調査報告 30: 119-139.
- 舟山直治・氏家等 1993. 道南地方の背負い袋(コダシ). 北海道開拓記念館調査報告 32: 45-58.
- 舟山直治 2011. サハリン州立博物館所蔵のボンシントコについて. 北海道開拓記念館研究紀要 40: 173-182.
- 森元辰昭 2018. 近代日本における麦稈真田業の展開. 岡山大学経済学会雑誌 49-3: 121-143.
- 三木理史 2003. 農業移民に見る樺太と北海道-外地の実質性と形質性をめぐって-. 歴史地理学 45-1: 20-36.
- 山田伸一 2007a. 『樺太日日新聞』掲載在サハリン朝鮮民族関係記事: 目録と紹介. 北海道開拓記念館調査報告 46: 117-178.
- 山田伸一 2007b. 在サハリン朝鮮人関係記事目録作りから. 挑水 4: 25-30.

資料編

資料① 小樽新聞、1910. 10. 23付。

●樺太の農家副業

樺太は、一年の過半殆んど氷雪中に埋められ、総ての事業閑散にして漫然徒食せざる可らざるもの少なからず。是に依て住民の大部分は、越年期前に於て多少の貯蓄を為すも、越年に入り尚ほ、生計の困難を訴ふることは、過去の事実に徴して毫も疑ひを容れざる所なりとす。特に農家に在ては、縦令作物に相当収穫ありとするも、冬季に於て徒らに日を送り坐食するが如き事あらば、忽ち衣食に窮すること必然なるを以て、農閑なる冬季を利用し手工その他の副業を営み、以て、自家の使用に充て若し剰余あらば、之を売却して生計を補ふの途を講ぜざる可らず¹。而して農家の副業として比較的好成績を挙げつつあるは、島産野草の製作品²に在りて、其原料の豊富なるものはモロチ、オホスグ、ハマコスグ、オホアシ、アイヌワラ、外に尚ほ数種あり³て、是等は筵、俵、繩その他適当なる農具を製作するに足れり⁴。就中、筵は農家に於て必需品なるに因らず、現今は多く北海道其他内地産を輸入し居るが如き、極めて不経済⁵にして、亦農家の欠点と謂ふ可く、政庁当局に於ては将来農家の副業として斯業の奨励法を講ずる由なり⁶。(樺太支局)

資料② 小樽新聞1911. 5. 16付

●樺太だより(8日付支局報)

▲モロツチ編物 大泊婦人会の製作品たるモロツチ編物¹は、其後高田技師の熱心なる教授²と会員の勉励とに因り、其製作品は頗ぶる好成績を示したるを以て、先般帽子編ミシン台を購入³し、尚ほ東京の某商店より見本帽子の送付方を依頼⁴し来れり。而して、原料のモロツチ草は、留多加方面の原野に密生して、殆んど無尽蔵⁵とも云ふべく。本年夏期に至り多量採集して、冬期の副業に農村部落の家庭、若しくは小学児童にも、之を製作せしむる計画⁶あり。尚ほ本品は、帽子に限らず畳表、其他の製作に関し研究中⁷なり。

資料③ 樺太日日新聞1911. 9. 2付

●モロチ草刈取利用

昨今頻りに大泊支庁にて着目し、其利用方法に就ては、支庁長は特に夫人其他に迄、研究¹せしめつつある。モロチ草は、従来の経営上、土用後両三日を経て刈取の最好時期と認めらるゝに至り。此頃、恰も其時機にして、且つ天候、亦頗る刈取、乾燥に適せる事²とて、大泊支庁拓殖係長中川屬は、今回其産地を視察³して歸れり。同氏の談に依れば、

▲視察地の概要 今回中川屬の視察したる区域は、ナクベより留多加川口に至る間に、此間約三里間は該草五間乃至十間幅にて海岸に密生連続⁴し、同氏は遂に視察を遂げざりしも、尚ほ留多加川口以南、多蘭内浜迄も此状態を以て一帯に発生し居り。今の所、実に無尽蔵の感あり⁵と聞。惜ナクベ附近は、放牧馬匹頗る多く、之がために損害を蒙りたる事も少なからざるが、西留多加方面に向へば、粕製造其他の肥料分を受けたるためか、一層良好⁶なり出来栄を呈せり。

▲葉茎と利用 葉は比較的広くして、六七分あり。茎も又太く、

丈は三尺乃至四尺内外⁷ありて、一見精工なる織物等の原料とならざるが如きも。之を乾燥すれば葉茎共に細く、且つ色沢良き原料⁸となる。

▲ナクベ村とモロチ 目下同草の刈取に最も熱心なるは、ナクベ部落にして、同村は目下戸数約二百戸⁹あり。各戸其恰も農漁其稍閑散期にある事とて、之れが刈取に専らにして、今日迄に乾燥品約五百貫匁か収穫¹⁰し居れり。又、同部落にては、現に該草を利用して畳表を織るべき機械二台を購入し居れるが、右は専売特許にして、輸送費を合せ一台五十円内外を要し、之を当地にて製作する時は、十五円の実費を以て完成¹¹し得べし。同村民の希望としては、将来毎戸に此機械を備付け、モロチ表をして、将来ナクベの名産たらしめんと云ふ¹²にありて。専売権所有者に交渉を重ね、当地に機械製造を為事の許しを得たる由なるも、尚ほ同村現在の資力にては、到底毎戸に備付けを為し難きを以て、農具購入と同様、官庁より多分の補助を給さるゝか、或は機械を官庁にて買上の上、貸付せられ度き希望¹³をも有せり。

▲該草の乾製法 同村民は研究の結果、其乾燥法を三種に別ち△素乾 刈取たるを其まゝ乾燥するものにして、天候宜しければ青色を帯び、非常に奇麗に乾上るも、乾燥中一旦雨に逢う時は、直に赤変するの憂あり。

△煮乾 命名不似合ならんも、這は刈取たる原料を一旦熱湯に浸し、乾燥するものにして、乾燥早く且つ色沢は殆んど白色となる。

△叩乾 刈取たるものを束ね、茎を木に叩き付けて乾燥するものにして、麻或は揉菜の代用となる¹⁴。

以上は各用途により各種の製法を採用しつつあり。尚ほ研究を重ねれば優良の品を得るに至るべく蓋し将来有望の副業原料¹⁵たるべし。

資料④ 小樽新聞、1911. 12. 19

●藁細工品と小樽

海陸物産用の為め、小樽港に於て集散さるゝ繩筵等の藁細工品は、年々巨額に及び本道に於ける重要品なるが、昨四十三年中、小樽港に輸入せる該品の種類及び価格は左表の如く、実に八十三万七千六百九十二円の多きに達せり¹。

	数量	価格
大間繩	二、九八三個	三、二八一円
中間繩	四七、五三六	二二、三四一
土本繩	三〇、一五六	六〇、三一二
大食繩	三五、八一〇	九二、一〇六
実子繩	二、六六九	二九、八九四
繩類	一五、七六三	二二、〇六七
筵類	四九六、〇四七	四二一、六四二
草鞋草履	六一、六八五	一八五、〇四九
計		八三七、六九二

繩類の生産地は酒田を第一とし、其品質極めて優良にして、筵類は佐渡を主とし、越中之れに次ぎ、吠類は越中を最とし、草鞋及草履は佐渡其主産地たり。尚ほ主なる藁細工品の主産地及び用途を挙げれば、左の如く、酒田、伏木、新町三港より輸入し来れる。価格は十万円以上。滑川、敦賀、三国の三港よりは価格五万円以上に及べり²。

	主限地	主なる用途
土木縄	酒田を主とし秋田、津軽	土木工事及雑穀類荷造
大間縄	酒田、秋田、津軽	海産物
中間縄	三国、秋田、酒田、敦賀、津軽	海産物及雑穀
大倉縄	酒田約七分、其他秋田、津軽	雑穀類荷造
樽掛縄	酒田大部分を占む	樽物下駄棒
実子縄	秋田を主とし、佐渡、越中	網製造及俵製造
網羽縄	佐渡	鯨場用
囊 薙	千葉、神奈川付近及越中、津軽	雑穀類荷造
干 薙	越中約七分、其他若狭、佐渡、三国、津軽	海産物、雑穀其他使途 広し
建 薙	越前	魚粕荷造用
折 薙	越中	農産物
鞍 薙	佐渡	菜種
叭	越中	菜種其他

草鞋草履 佐渡、秋田、越前

尚、小樽商人の勢力範囲に属する藁細工品の需要地は、鉄道に依るものは南は昆布駅付近より、山方面は帯広駅付近までとし、船便に依るものは、小樽以北網走迄の沿岸各港及樺太等とし、以南各港の需要未だ多からず。数年前迄は、海産物として需要せらるゝもの大部分を占め、現今は農産用に供せらるゝもの約七分を占むるに至れり³。

資料⑤ 樺太日日新聞、1912. 3. 7

●モロチ利用事業

湾内江の浦(ナクベ)居住の中野恒蔵氏は、嶋産モロチ草の利用方法に就き、数年来苦心研究¹を怠らざりしが、昨年に至りて畳表及び薄縁を製造せんことを思ひ付き、先づ岡山県より一台の機械を移入し、更に同器に模して九個の機械を作り。都合、十台を据付けて盛んに製作中²の由なるが、四日迄には畳表薄縁共二百枚を作らんとの予測にして、製品は全部大泊に出し販売³しつゝあるが、其質頗る丈夫にして座敷用としては適せざるも、漁舎又は農家等にて使用するには極めて適当なれば相当の売行⁴ある由なり。今後、需用時期の到来と共に一層良好なる売行あるべく、目下の小売価格は、畳表通し織一枚四十五錢。精良中継織一枚五十錢にして、普通の畳表に比し、非常に徳用⁵なりと云ふが、一枚に付き原料たるモロチ草、麻糸等十六錢を要する由にして、一台の機械を以て一日四枚を織り得べきに付き、一人一日約一円の工賃を得られるゝ訳なれば、農家の副業としては甚だ利ある⁶べく。氏は、尚ほ今後販路を島外に求め、一層拡張して経営すべき方針⁷なりと。

資料⑥ 樺太日日新聞、1912. 4. 11

●モロツチ編の優等者

昨年十月来、庁立大泊小学校の上級女兒の手工科¹に好評嘖々たるモロツチ夏帽の真田の製作を課したるが、其編方は、五平編と四菱編の二種類にして、熱心なる教授者の効果は、茲数箇月の中に著しく現はれ、技倆の上達驚くばかり²にて、特に優等の成績を得たる児童の製作品は、玄人も裸足だと、其道の人は驚嘆し居りたるを見ても如何に巧妙の出来栄なりしかを推察し得べし。

而して製作品の全部は、一昨九日支庁長室内に持出され、関係者の審査を経たるが、其結果、特等の評定を得たる者六名、甲七名、乙十六名、丙十名、丁三名にして、昨年度の尋六以上の女兒は、殆んど出品³し居りたり。尚ほ、成績佳良なる左記十三名には近々支庁長より賞品を授与さるべし⁴といふ。

△特等の部 久保スミヲ、却野ミキエ、渡邊サダ、小竹セツ、犬飼シズ、西田ナツ

△甲の部 岡ツル、前ウメノ、仁岸キツ、野呂イツ、松原キヨ、海老名ミツ、川崎キミ

資料⑦ 樺太日日新聞、1912. 4. 23

●野草製品販売

這般報道したるが如く、庁立大泊小学校上級児童の手工科に課して製作したるモロツチの真田は、目下技術者の手元にて夏帽子に制作中¹なるが、尚ほ、真田を取抜きたる残物は、土瓶類若くは火鉢の下敷物に製作し、是等は近々相当価格を附して販売²する筈なり。亦、現時留多加管内にて、モロツチ薙製造に運転しつゝある機械は十台にて、冬季間多数の筵を製出し、何れも附近農村部落及び雑漁者に販売して、非常の好評³を博し。猶ほ、昨年製作者の技術も頗る進歩して精巧なる品を出し、新来移民民の需要に応じつつあるが、過日も真岡地方より二百枚の注文あり。其他十枚乃至二十枚の注文、引きも切らず売行頗る良好⁴なりと。

資料⑧ 小樽新聞、1912. 4. 29

●樺太より(廿五日支局発)の一項に、

▲野草製品販売

大泊小学校上級生の手工科に課し、製造せるモロツチ真田は、目下夏帽子に製作中¹なるが、尚、真田を抜きたる残余を以て、土瓶火鉢類の敷物を製する²筈なり。亦、留多加管内に於けるモロツチ薙製造機械運転数は十台に達し、好評を以て販路は拡張せられつゝあり³。

図版 I



1 モロチが繁茂する砂浜 (江差町南浜、1992)



2 モロチ (江差町南浜、1992)



3 腰丈のモロチ (江差町南浜、1992)



4 モロチ (江差町南浜、1992)



5 カンカン帽



6 夏用帽子

図版 II



1 Tatsunohige (江差町、1992)



2 乾燥中のTatsunohige (江差町、1992)



3 Tatsunohigeの縄織い (江差町、1992)



4 Tatsunohigeの縄 (江差町、1992)



5 餅干しに活用していた野草の敷物 (江差町、1992)



6 背負い袋の編み台 (上ノ国町、1992)

Wild Grass Handicrafts on Former Karafuto: Winter Season Side Businesses in Odomari and Rutaka during the 1910s

FUNAYAMA Naoji

This study investigates winter season side businesses which utilized the abundant wild grass found growing along the coast near the town of Rutaka, located on Aniwa Bay at the southern end of Karafuto (presently Sakhalin). Source materials include articles published by the *Otaru Shimbun* and *Karafuto Nichinichi Shimbun* newspapers between 1910 and 1912. of particular note, we have found that during a three-year initiative of the Odomari Subprefecture Office of Karafuto Prefecture, the government provided detailed instructions of how to produce handicrafts utilizing the island's wild grasses, and fabrication methods including processes and tools for each product.

These wild grass handicrafts were seen as a

promising industry with the potential to provide stability in Karafuto's winter season, and, at least during the early 1910s, public and private sector initiatives were in place to support it. Research by Odomari Subprefecture towards encouraging and popularizing side businesses were based on a previous private enterprise in Rutaka Town; handicraft promotions carried out by Odomari Subprefecture reached groups such as women's associations and elementary schools in Odomari City. This led to the creation of new private businesses and contributed to improvements in lifestyle stability during the winter season. These initiatives can also be considered forerunners of the 'local products for local consumption' movement.